

病床記 ①

月 日 曜 天候

一 佐 月 塩

(佐伯市匠南区)

自分自身のことでは紙面をけがすのは気がひけるが、人ごとにいちいち丁寧に説明するのも面倒なので、その手数を省くものとしてお読み下さい。

昭和六十二年二月十七日、台湾の教え子達に小包の発送を兼ね、本局へカブで向っていた。郵政省は民主化が遅れているのか、外国向小包は本局以外では取り扱わないから不便が多い。国内同様にどの局でも扱ってほしい。

この時期、幹線道路では至る所で下水道のマンホール工事が行われていた。伊豫銀行と広小路の中間、フランソワール菓子店の左側を通行中、全く予期しない深い溝に入り込んでしまった。工事中の縄張りのかなり前方でしかも自然に深くなっていて、「工事中」の立札もない深い溝に気がついた時には驚いた。(これは危い)と思

った時は既に遅く、カブは転倒して体は投げ出され、失神した。この様子を店内から見えていたフランソワール菓子店主は、直ぐに救急車を手配すると共に散乱した持ち物を店の紙袋に拾い込んで、救急車に託してくれた。

「このおじいさんわりときれいなね」

と、かすかな女の話し声。当日、私は白いセーターを着ていた。話し声は看護婦らしい。

「ここはどこですか」

と聞くと、

「西田病院ですよ。気がつきました」

「どうしてここに」

「救急車で連れて来られたのです」

治療中にやっと気がついた。けがは右眉に三・五センチの裂傷があり、三針縫い、他の手の甲にかすり傷とのことであった。

気がつくのと、直ぐ事故係の警官が来て、いろいろと尋ねられたが、転倒してからはまるで記憶がない。そのうちに思い出しますからと言われたが、今日に至っても記憶の糸は、転倒と共にぶつ切り切れてつながらない。

「あら先生。どうなさったのですか」

との中学時代の教え子看護婦の出現によって、以後「おじいさん」の呼称は「塩月さん」になった。病院は誰彼となく「おじいさん。おばあさん」呼びはやめて、「○○さん」と名前を呼んだ方がよい。

眉上の裂傷のため、頭部の断層写真をとった結果、大きな曇りが発見された。

「決して悪質なものではないが、大分医大を紹介します。傷の痛みは何もないと思いますが、今晚もし頭が痛くなると困まるから、大事を取って入院したら」

とのこと、それに従う。そのうちに、化膿止めを看護婦が持ってくる。化膿止めといえばペニシリンが常識であるから、あわてて強いペニシリンアレルギーのあることを言うと、医師は確認もせず、これはペニシリンではないでしょうと言う。このため、夜と朝二回飲んだだけでペニシリンアレルギーが現われた。十時過ぎ退院する時には、介添えを得てやっとタクシーに乗る。

病気の重大性を考え、三四日後、ペニシリンショックが大分治まった処で南海病院に入院して検査を受けた。三日間の細密検査の結果は、ほぼ西田病院と同様だった。

県立病院を紹介されたが、場合によっては東京へ行きたい旨を伝える。身辺が急にあわただしくなる。史談会のこと。東京行きのこと。最少限の人々への連絡のことなど。

南海病院よりレントゲン写真を譲り受け、東京へ速達便で送る。東京では長男が孤軍奮闘の結果、二三日後に良い医師が見つかったと、夜を待たずに電話がある。東京慈恵大青戸病院の医師で、アメリカ・西ドイツに留学し、日本における臨床の大家であるとのこと、直ぐ詳細な日程の打合わせを依頼する。

やがて、東京との電話のやりとりがひん繁になる。

「主治医に面会してきたが、まだ若くおとなしそうな人だ。南海病院のレントゲン写真を見て、（これはひどい重症だ。至急手術をしないとイケない。これでは右眼は見えないのではないか。このままにしておくと、やがて左眼も失明し、生命にも危険が及ぶ）とのことだから至急上京せよ。」

事実、この時点で右眼は既に失明状態にあった。

「上京はいつでもする。至急日程の打合わせをしてくれ」と依頼する。